

上野一彦

東京学芸大学総合教育科学系教授

ソーマツケンジ

画家

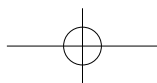


VS



難読症

学習障害の一つである難読症(ディスレクシア)。知的能力や学習能力の脳内プロセスにとくに異常がないにもかかわらず、知っているはずの文字を読むことができなかつたり、読んでもその意味が理解できないなどの症状が現れます。言語能力をつかさどる左脳になんらかのトラブルがあり、それが原因となっているとされていますが、はっきりとしたことはわかっていません。難読症は生命にかかわるような重篤な病ではなく、高校や大学などにふつうに通う方も多いため、周囲からは理解してもらいにくい病気の一つです。





強さのもとには怒り。
私はものすごく怒っている。

難読症は、わが国ではあまり知られていませんが、幼児期から子ども時代に多い学習障害の一つです。しかし、難読症のお子さんには、しばしば別の才能が見いだされます。本誌の表紙を二年間担当していた大英の画家、マッケンジー・ソーブさんもその一人。難読症に苦しみながら好きな絵を描き続け、今や子どもたちへの愛を世界に発信する存在となりました。

マッケンジー・ソーブ

- Mackenzie Thorpe
- 1956年生まれ
 - 睡眠時間は平均7時間
 - 好きな食べ物は「そば、すし」
 - 嫌いな食べ物は「ファストフード」
 - お酒は1日に「ビール中びん2本程度」
 - タバコは「吸わない」
 - 趣味は「子どもたちとのワークショップ」
 - よく見るテレビ番組は「サムライムービー」
 - 現在、実行している健康法は「とくになし」
 - 身長170cm、体重80kg

子どもたちへの圧力をほすたい

上野●今回の来日の感想は。ソーブ●皆さんの思いが毎年強くなっているのを感じます。握手やハグなど、表現が自由になって温かい交流ができるよう

になりました。上野●ソーブさんは子どもに会いたがりますが、今回はそういった活動もあるのですか。ソーブ●私はワークショップをやっています。そこでもっともやりたいのは、子どもたちを抑えつけている圧力を外すこと。

それができると、子どもたちはすごく変わります。たとえば、今回最初にやったワークショップでは、生徒たちはなかなか話をしないし、絵も描かない。原因は大人がつくった規則のなかで生活しているためでしょう。しかし、ワークショップが終

わって教室をでると、子どもたちは私に飛びついてきました。教師や親の目から離れたとたんに、すごく自由になって気持ちのが爆発するのではないかと思います。上野●なるほど。ソーブ●私は子どもたちに「描

きたいものを自由に描きなさい」といっています。今回のワークショップでは、一人の少女の描いた絵があまりにもすばらしく、その絵からピカソを思いだしました。ピカソは九十歳になったとき、「子どものように絵が描けたら、本物のアーティストになれる」といいました。

さらに「大人のもつしがらみをとって、描きたいものを描くことができるのが本物のアーティストである」とも。ワークショップをやっていると、子どもには可能性がたくさんあることがわかります。それをきっかけに、アカデミー（学校）をつくりたいという気持ちになりました。

生きる場所がなかった少年時代

上野●子ども時代はどうすごしていましたか。ソーブ●あまりよい思い出はありません。成績が悪くて、いつも教室の片隅で絵を描いていました。上野●ピカソと同じですね。ソーブ●思いますが、十歳のときの遠足です。あとで先生に「遠足で見たものを描きなさい」といわれて、いちばんよく描け

たのが私でした。みんなの絵は平面的でしたが、私の絵は立体的だったので、先生が「あなたにはそういう目がある」といつてくれました。でも、私の故郷は絵など芸術に理解の乏しい工業地帯なので、いい絵が描けてもなんの意味もありません。そんなことよりも手に職をつけて工場で働かなければならない土地柄でした。だから勉強と職業につながる才能以外は無視されました。アーティストの生きる場所はなかったのです。上野●今の日本と似たところがありませんね、勉強だけという。私は最近、難読症（ディスレク

上野一彦

- うえの かずひこ
- 昭和18年生まれ
 - 睡眠時間は平均5時間
 - 好きな食べ物は「和食」
 - 嫌いな食べ物は「ホヤのみ」
 - お酒は「週に2〜3回」
 - タバコは「吸わない」
 - 趣味は「テニス、スキー、読書」
 - よく見るテレビ番組は「BSチャンネル、スポーツ、ニュース」
 - 現在、実行している健康法は「散歩、ストレスを感じないようにすること」
 - 身長163cm、体重75kg



怒りもエネルギーになることがあるのですね。

マッケンジー・ソーブ氏による、これまでの表紙





シア)で苦しんだ人たちの伝記を調べました。アインシュタインやエジソンなど、有名な人が一〇〇人ほどいます。その人たちは理解してくれる家族や友だちがいきました。ソープさんはどうでしたか。

ソープ●残念ながら、そういう人はいませんでした。私を励ましてくれた先生も、すぐに学校を去ってしまいました。その後私は、絵ばかり描いている生徒だったので、先生から障害さ、綴友から仲間はずれにされました。私は「ふつうになりたい、みんなの仲間に入りたい」と思っ、しばらく絵をやめました。その頃は本当に気持ちが悪く落ち込んで、将来の希望はまったくありませんでした。

上野●でも、そこでだめにならなかった。その強さはなんなのでしょうか。

ソープ●怒りです。私はすごく怒っている。

上野●怒りもエネルギーになることがあるんですね。

ソープ●私は七歳のとき、運命のようなものを感じました。自分は将来、プロで描くのがねをかけた女性と結婚し、男の子と女の子に恵まれ、アーティストになって九十七年の人生をまっとうする、と。でも、それを他



私は人々が失ってはいけないものを描いているのです。

人に話すことはできません。「なんておかしなやつだろう」と思われますからね。それに、自分の感じたものが、実際の生活とかけ離れていることもわかって

いました。それが、「どうしてみんなと同じになれないのか」という怒りになったのです。今もその怒りは消えていません。私の作品には、子どもの死や自殺など重いテーマがたくさんあります。そういうことを考えながら絵を描いていると、怒りにふるえて仕事ができなくなったり、涙を流すことがあります。上野●その感情が非常に力を感じる絵になるんです。

置かれている子どもをとりあげた作品があります。いつバランスを崩してがけから落ちてしまいかかわらない子どもの絵です。その絵に描かれているように、子どもたちは危険な状況にあります。大人が子どもをあやめたり、競争で子どもが命を落とす、そういう状況はとても悲惨です。大人はそれをよくわかってるのに、子どもたちの純粋さや誠実さを自分たちに都合よく使っている。とても怒りを感じますね。

特徴はダッフルコートの少年とハート

上野●ソープさんの絵の特徴は、ダッフルコートの少年。そして、その少年の顔は描かれていない。そこには大きなメッセージがあると思います。

ソープ●私の育った街では、ダッフルコートは貧しい家庭の子どもの着ていました。ダッフルコートはその象徴なのです。顔がないことは、そのような状況がどんな子どもにもおこりうることを意味しています。私たちは、悲しみや痛みをもつ子どもと毎日すれ違っています。で

も、そのことに気づかない。これは本当に危険なこと。大人は、そういう子どもを見たら、物質的な援助をすればよいと思っている。これも大きな間違いなのです。

上野●ソープさん自身から見ると、ほかに特徴的なものはありますか。

ソープ●ハートですね。私は、素直で誠実で愛にあふれた子どもをよく描きます。私が美しい子どもたちを描くのは、それを見た人たちに、今、自分がどんなにひどいことをしているかを知ってほしいからです。たとえば、アフリカには飢餓で死ぬ子どもがたくさんいます。でも私は、死んでいく子どもを描きたくはない。純粋で幸せな子どもを描くことで、みんなに「この子たちを守らなければ」と気づいてほしいのです。環境汚染や地球温暖化も同様です。美しい自然を描くことで、それを破壊することの恐ろしさを伝えたい。私は、失ってはいけないものを描いているのです。

妻や子どもたちが勇気を与えてくれた

上野●自分の絵がほかと違うと意識し始めたのは、いつ頃ですか。

ソープ●小さい頃は、ほかの子と違うとは思っていませんでした。大きくなって偉大な画家の絵を学ぶようになって、自分の絵がどの画家、アーティストとも似ていないことに気づきました。とくに四角い羊の絵など、誰も描いていなかった。不安にもなりましたが、そのとき勇気を与えてくれたのが妻でした。彼女が「おかしなことはないから続けなさい」と励ましてくれたので、描き続けることができました。今では私の仕事のマネージメントをしており、あらゆることを彼女と相談して決めています。世界でいちばん美しく、唯一信頼できる人。よく日本では「この人のためなら死ぬ」といいますが、妻は「この人のために生きたい」と思える唯一の女性です。

上野●お子さんは？

ソープ●息子と娘がいます。息子は難読症があります。最近大学を卒業してダウン症の青年たちを助ける仕事をしていました。学生時代に「他人に親切にすること」「他人を敬うこと」を学び、それが仕事に役立っているようです。娘は小さい頃から女優になるのが夢で、英国にある大学の演技科に通う二年生です。母親に似て、ものすごく

強い(笑)。二人は私の誇りで、仕事の原動力です。

上野●日本には、難読症がわからない人がたくさんいます。最後に、もっとも大切な「夢をあきらめない」こと。どの人にも可能性がります。その可能性を追求する唯一の秘訣は、「やめないこと」です。私ができるのですから、誰にでもできると思います。

上野●日本でも、ソープさんが来るたびに輪が広がっています。今後も愛の世界、愛を運ぶ世界を広げたいですね。

(二〇〇六年十月三十日収録)



ホテルのロビーで開かれた個展。

撮影/和田靖夫

マッケンジー・ソープ氏による、これまでの表紙

